MY LIFE 住まいの しあわせのカタチ MY HOME

森崎ウイン

俳優・アーティスト

エンターテインメントを通して祖国と世界の架け橋になりたい。この夢、いつか叶うと信じています

ミャンマーで生まれ育ち、日本でエンターテインメントと出会って
世界を目指す、グローバルなバックグラウンドが魅力であり強み。
どんな役にも自然にはまる柔軟な演技力で、人種・国籍を軽やかに超え、
ドラマ、映画、ミュージカルと、多彩な活躍をみせる森崎ウィンさん。
チャーミングな笑顔の奥に、熱い思いと決意が見えました。

Profile

森崎ウィン（もりさき うぃん）

1990年、ミャンマー・ヤンゴン生まれ。小学4年の春に来日。中学2年のときスカウトされて芸能界へ。2018年公開の映画『レディ・プレイヤー1』で主要キャストに抜擢され、ハリウッドデビュー。2020年には映画『蜜蜂と遠雷』で第43回日本アカデミー賞新人俳優賞を受賞。映画やドラマ、舞台で幅広く活躍。歌手としても2020年に“MORISAKI WIN”名義でメジャーデビュー。W主演を務めた日タイ合作映画『（LOVE SONG）』が2025年10月31日（金）全国ロードショー公開される。

ミャンマーで祖母と暮らした日々が僕の土台になっています

僕はミャンマー出身で、100％ミャンマー人です。10歳のとき、両親の働く日本に来たんですけど、それまではずっとミャンマーで、おばあちゃんと暮らしていました。僕の育ったヤンゴンは元首都だったところ。家の周りにも外資系のホテルとか高層ビルが立っていて、ミャンマーのなかでは洗練された街でしたね。ただ近代的なばかりじゃなくて、そういうビルのすぐ隣に昔ながらの屋台が並ぶ通りなんかもあったりして、今と昔が融合したような街並みだったのを覚えています。

イギリス領だった時代の名残でレンガ造りの建物が多くて、僕の家もその1つ。5階建てだけどエレベーターのない、古いマンションの最上階でした。メゾネットタイプのような造りで、おばあちゃんが家で英語塾をやっていたのでリビングはけっこうな広さがあって。これから英語で仕事をしたいっていう思いを持った方が、大勢通ってくださっていた。だから英語はめちゃめちゃ聞いていましたね。おばあちゃんは音楽が大好きで、洋楽もたくさん聴かせてくれました。

おばあちゃんは、僕の人格の土台となる部分に、一番影響を与えてくれた人。ものの考え方とか価値観とか、彼女から学んだことはすごく多い。それに、先生としての一面もよく見ていましたから。人当たりが良くて、良い意味で“人たらし”。いつも周りに人がいて、いろんな人に支えられていた。人を動かす力のある人なんだなと、こどもながらに思っていました。今、人前に立つ仕事をしていて、何かを表現するとき自分の底から湧き出してくるものって、きっと、幼い頃に間近で見ていたおばあちゃんから受け取ったものだと思うんです。

今思えば、あのとき両親が僕を日本に引っ張ってきてくれたおかげで、こうしてこの場にいられるんですけど。当時は本当に寂しかったし怖かったし、行きたくないと泣きました。でも僕以上にショックを受けていたのは、きっとおばあちゃんで。それでも僕の将来のためだからって。バイバイするのに涙を見てないんですよ、1回も！

何年も経ってミャンマーでお仕事をさせていただく機会に恵まれたとき、周りの人たちから、僕がいなくなったあとおばあちゃんが大変だったと聞かされました。精神を落ち着かせるために、お寺にこもったりもしたそうです。あのときは気づかなかったけど、今ならその気持ちがよくわかる。少しは恩返しができてたらいいなと思います。

母国と日本を、そして世界をつなげられる人になろうと決めました

高校2年でドラマデビューしたものの、決して順風満帆ではなかった僕の人生を変えてくれたのが、スティーブン・スピルバーグ監督の『レディ・プレイヤー1』という作品。オーディションに受かって、映画が公開されて、ようやく表舞台に出られた感じです。

人生には思いがけず起こることってあるじゃないですか。金利が上がるとか（笑）。いろいろあると思うんですけど、ハリウッドデビューはまさにそれ。実はちょうどその1年前のエイプリルフールで、当時やっていたブログに「ハリウッド映画、決まりました！」って書いたんですよ。そうしたら、1年後に現実になった。人生の運を使い切ったんじゃないかっていうくらい、すごいミラクルが起こったんです。それまでは、日本で一歩でも上に上がるためにがんばることが最優先で、世界を視野に入れる余裕なんてありませんでしたからね。

当時、ダンスボーカルユニットに所属していたんですけど、映画の宣伝でテレビ出演が増えたのがきっかけになって、日本とミャンマーの文化交流イベントに何度も呼んでもらえて、凱旋帰国を果たすこともできました。ミャンマーのメディアも取材に来てくれて、母国での知名度も爆発的に上がった。そのとき思ったんですよ、「俺、ミャンマーと日本をつなぐ架け橋になれるかもしれない。ミャンマーを、もっと世界中に広められる人になりたい！」って。それが、ミャンマーを背負っていくと決めたターニングポイントになりました。

自分のルーツであるアジアをもっと知りたいし、いろんな国の作品に参加したい。そのためには日本での立ち

MY LIFE 住まいの しあわせのカタチ MY HOME

楽をかけたり、ぼーっとしたり。ちょっとお酒を飲みながら、趣味のキャンプの動画を見たりするのが好きですね。次に進むための、大事なリセットの時間です。

仕事の軸になっているのは俳優業だけど、同じくらいに音楽活動も大事で、どっちが欠けても僕じゃなくなる。音楽っておもしろいですよ。そこに行って誰かに会って、たとえ言葉がわからなくても、ギター1本あったら何でもできるんですよね。つながれるんです、すぐに！　僕自身、音楽に救われたこともたくさんあったし、大好きなアーティストからいつも力をもらっている。音楽の力ってすごく強いなと思っていて。だから僕も、文化だとか国籍だとかっていういろんなボーダーラインを、音楽の力を借りて超えていきたい。そういう意味でも、音楽を続けていきたいと思います。

世の中に貢献できるような人になりたいなということは、いつも考えているんですよ。人助けっていうのもおこがましいし、自分のエゴみたいな感じがしていやなんですけど、だって人は死ぬとき、全部持っていけるわけじゃないから。自分の人生をある程度豊かにできたら、あとはもう、分け与えていきたい。

位置をもっと確立させないとだし、もちろん技術ももっと高めていかないといけません。そのために努力する。やりたい！という目標を掲げながら、いつどんなオファーがきても対応できるように、自分なりの準備をしておこうと、今、日々がんばっています。

エンターテインメントが届けられない そんな場所でも、誰かの力になれたらと

30歳で本格的に1人暮らしを始めたんですけど、住まいをちゃんとしようと思ったのは最近かもしれません。家にいる時間が少ないからこそ、その少ない時間でいかに自分のマインドをリセットできるか、真剣に考えるようになりました。居心地のいい、帰ってきたくなる空間をどうつくり上げるかというところにベクトルを置いて、家具の配置を考えたりインテリアを買い替えたり。今まで興味のなかったキャンドルを焚くようになったのも大きな変化。キャンドルの灯りだけにして、好きな音

もちろんエンターテインメントを通して誰かの心を支えたいという思いは強くあります。でもね、エンターテインメントって、平和の上に成り立っているんですよ。エンターテインメントではできないことって、悔しいけれどたくさんある。それを必要としているところに自分のエンターテインメントが届けばうれしいし、明日への糧にしてくれたらこのうえない喜びなんですけど、そうじゃないところには、自分が行ってこの目で見て、もっと直接、何かできたらいいなって。まあ、それはもう少し先の話です。今はまだ、自分のことをがんばらなきゃ。その日がくるまで、力を蓄えようと思っています。

インタビュー動画は住宅金融支援機構（JHF）YouTube公式チャンネルでご覧いただけます
https://www.youtube.com/playlist?list=PLcbOj07XtnfKA4_r_69-mElwHrGxjyKXi